

目次

序論

**第一部 文芸思潮と理論物理学の交通と接点**

第一章 「科学的精神」の修辞学——一九三〇年代の「科学」ヘゲモニー

第二章 「現実」までの距離——石原純の自然科学的世界像を視座として

**第二部 横光利一の文学活動における理論物理学の受容と展開**

第三章 新感覚派の物理主義者たち——横光利一と稲垣足穂の「現実」観

第四章 観測者の使命——『雅歌』における物理学表象

第五章 「ある唯物論者」の世界認識——『上海』と二〇世紀物理学

**第三部 モダニズム文学者と数理諸科学の邂逅と帰趨**

第六章 「合理」の急所——中河與一「偶然文学論」の思想的意義

第七章 多元的なもののディスクール——稲垣足穂の宇宙観

第八章 「怪奇」の出現機構——夢野久作『木魂』の表現位相

結論

本博士学位請求論文（以下、本論文）は、昭和初期に活動した文学者たちが、理論物理学ならびにその周辺領域の学術的知見をどのように受け止め、またそこにもどのような思考の可能性を見いだしていたのか、その総合的な表現営為のありようを解明することを試みたものである。これまでの先行研究においても、とりわけモダニズムと呼ばれる時代思潮のなかで、先鋭的な態度を持った文学者や芸術文化の担い手たちが、こぞって理論物理学をはじめとする各種自然科学へと着目し、そこにひとつの潮流を築き上げていたことは多く指摘されている。だが、それらは概して一過性の流行現象としてのみとらえられており、現状その方法的な探究が充分に考察されているとは言いがたい。「科学」と「文学」を媒介する書き手たちの問題意識の実質を把握するためには、何よりも双方の領分を横断する言説空間の総体を検討する必要があるだろう。

本論文では、昭和初期の論壇・文壇へと分け入っていき、同時代の文学場における自然科学受容の実態を明らかにすることで、今日の眼からは一括りにみなされてしまいがちな「科学」的なものの諸相を、通時的・共時的に問いなおすことを試みる。以降、本論では「科学」と「文学」のかかわりを単に一方向的な手段・目的の関係に還元するのではなく、双方を含み込んだ総体的な文化現象として再定位することを目指したい。

本論文は、全三部八章に序論・結論を加えて構成されている。序論では、まず近代自然科学の成立と展開をめぐる思想的な背景を概観したうえで、二〇世紀物理学において何よりも重要なのは、それが一七世紀以降の理論物理学史においてきわめて稀なことに、理論知が実践知を超越するかたちで、発展を遂げてきた特異な分野であったということを確認する。相対性理論や量子力学の考え方において、私たちが素朴に感得する経験的な尺度は全く意味を持たない。そこに介在しているのは、自然科学の方法論に包含される学術的な問題系というよりは、むしろ一種の解釈学的な（＝出来事や法則の理解の仕方にかかわる）問題系にほかならない。昭和初期の文学者たちは、ここにひとつの新しい創造的表現の可能性を見いだすことになったのである。

もつとも、昭和初期文壇のなかで理論物理学の学術的知見が初めて本格的に援用されるようになったのは、主にマルクス主義科学に集約されるような機械論・唯物論の文脈においてであった。素朴实在論に支えられた唯物思想の立場を前提にしてみれば、当然ながらマルクス主義科学と結びつかない理論物理学の成果は一括りに断罪されるほかない。だが、昭和初期においては、従来の素朴实在論に支えられた古典物理学と並存するかたちで、その存立機制を問いなおすような現代物理学の萌芽が同時に輸入されていたのであり、そこにはマルクス主義科学をはじめとした単一の思想潮流に収斂されることのない多層的な厚みが見いだされるはずである。したがって、その重層性を圧縮することのないままに抽出してみることは、モダニズムという時代における総合的な言説空間のありようを描き出すための大きな一歩となるだろう。

第一部では、個別の作家・作品に分け入って内在的に考察を展開する足がかりとして、まずはそれぞれの文学活動のあり方を枠づけていた思潮動向に焦点を当てて

論じてみたい。

第一章 「科学的精神」の修辞学——一九三〇年代の「科学」ヘゲモニー」では、一九三〇年代を中心に「科学的精神」という語句が用いられた言説群を跡づけていくことで、「科学的精神」という一風変わった表現のあり方が、同時代の文化・社会情勢において、どのような磁場のもとで発生したものであったのか、その成立と変転の諸相を考察してみたい。そこには、専門知としての「科学」の領分に「科学的精神」という修辞<sup>レトリック</sup>が施されることで、両者の包摂する概念圏域を不可避的に混濁させてしまうような言説の力学が、おのずと浮かび上がってくることになるだろう。

この章での目的は、論壇・文壇・科学者共同体における論者たちの意向が、相互に交響し合うことよって形成された一九三〇年代の思想圏を解きほぐし、それぞれの立場から発せられた言論の様態が、互いに緊張関係を切り結ぶ瞬間を描き出すことにある。各々の論者たちは、「科学的精神」という表現を戦略的に駆使しつつも、その表現自体が織りなす場の力に翻弄されていた。それは、同時代の言論環境において、議論の土台となるはずの「知」の制度が、複数の言表行為のなかで協同的に構築されながらも、同時にその協同性を突き崩してしまおうような亀裂を抱え込んでいたことを意味してもいよう。そのような観点から導かれる考察は、一九三五年前後の「偶然文学論争」が、ついに生産性のある議論へと帰着しなかったことの原因についても、ひとつの有効な視座を提示するものとなるだろう。

第二章 「現実」までの距離——石原純の自然科学的世界像を視座として」では、大正後期から昭和前期にかけての文壇・論壇で広く活躍していた理論物理学者である石原純の論説を検討する。石原によれば、近代自然科学における現実概念とは、人びとの内在的な経験のなかで「世界形像」として「統一」化されるまでの心的過程において出来るものであり、もとより私たちの現実認識もまた、そうした「抽象」||「総合」化の機制によって知的に根拠づけられたものにほかならない。それは、芸術活動における現実認識にも敷衍されるものであった。だからこそ、石原は「科学」のみならず「文学」の領域においてもまた、新しい現実概念をめぐる記述作法の必要性を繰り返し講じていくのである。

そのような石原独自の「科学」論ないし「芸術」論は、一九三五年前後の文壇・論壇において巻き起こった諸々の論争の理論的な基盤を下支えするものであった。横光利一の「純粹小説論」や中河與一の「偶然文学論」、さらには同時代歌壇における「現実主義論争」などを並行的にとらえてみれば、いずれもそれまでナイーヴに受け取られていた現実概念に対する認識布置の転換を促す試みであったことが了解できる。それらは総じて、石原が考究しつづけた「現実を新たに創造するための方法」と密接に関係づけられるものであったと言えるだろう。それはまた同時に、この時期の文学者たちの活動のなかで、単なる知的な装飾として二〇世紀物理学の学術的知見が援用されていたというよりは、そこに示されたさまざまな試行錯誤の様相と同時代の科学的方法論が、より深いところで結びついていたことの証左ともなっていよう。今日の文学研究において顧みられることの少ないそれらの影響関係の実態を跡づけることで、以降の各論の土台をなす部分を整理しておきたい。

第二部では、一九二〇年代から三〇年代前半において「文学」と「科学」が有機的な交錯を果たしたひとつの事例として、新感覚派の旗手として名高い横光利一と理論物理学の交錯に焦点を当ててみたい。

第三章 「新感覚派の物理主義者たち——横光利一と稲垣足穂の「現実」観」では、ともに新感覚派の一員として括られる横光利一と稲垣足穂が、理論物理学の学術的知見をどのように受け止めていたのか、その具体的な受容の道筋をたどりなすこととで、一九二〇年代における両者の世界認識の差異を浮かび上がらせる。横光の理論的マニフェストとしての論説「感覚活動」で展開される人びとの認識作用を仲立ちとした主観・客観の運動図式は、科学思想史の領域において、一九世紀におけるE・マッハの現象論的物理学と親和性が高い。ここから、新感覚派時代の横光の方法論的な功績を、ある種の形而上学批判（＝ニュートン物理学で前提とされていた「実体」なるものの否定）として再考することができるだろう。

一方で、同時代の足穂は、むしろ二〇世紀物理学におけるA・アインシュタインの一般相対性理論と親和性を持つような時空間表象の遊動性に眼を配っていた。横光の拘泥した認識論的な問題系には興味を示さず、足穂は「いま・ここ」を超え出ようとする無数の存在様式としての異世界の姿に思いを馳せた。言わば、足穂にとって理論物理学とは、現象世界の多元的な様相を肯定するための思弁的な橋頭堡だったのである。そのような両作家の方法意識の隔たりを検討することを通じて、それぞれの文学活動をより立体的にとらえなおしてみたい。

第四章 「観測者の使命——『雅歌』における物理学表象」では、横光のなかで本格的に「心」＝「内面」の問題と「科学」の問題が結び合わされつつあった時期の作品として、一九三一年に発表された長編小説『雅歌』を検討する。『雅歌』の本文は、当初『報知新聞』に連載された初出版と、横光の死後すぐに刊行された改造社版『横光利一全集』に所収の全集版とのあいだに、少なくとも異なるが見られる。その修正箇所を注意深く追ってみると、初出版に比べて全集版の語りでは、明らかに羽根田の「物理学者」としての側面が強調され、それによって作品全体のよそおひもまた新たに再調律されていたことが確認できる。これは後年に施された修正であるものの、そこに示された「科学」的なものへの指向性は、初めの連載時点ですでに持っていたと考えることができよう。観測者としての羽根田の言動には、同時代の横光が直面していた認識論的な躓きが、決して解決されることのないままに、ひとつの切迫したアポリアとして描き出されていたのである。

併せて、具体的な物語内容を検討してみると、科学者である主人公の羽根田は、「観測」という行為を物理学的に考究することにこだわりつけ、ゆえにみずから「心」を「観測」することの原理的な困難に嵌まり込んでしまっていたが、まさに一九三〇年前後の理論物理学においては、観測者は観測対象に何らかのかたちで不可避的に介入せざるをえないといった立場が支配的となっていた。その理論的な中枢を占めていたものこそ、W・ハイゼンベルクの不確定性原理に集約される量子論・量子力学の学術的知見にほかならない。そこには、認識論的なパラダイムの転換という共時的な文脈を紐帯として、「文学」と「科学」の双方にまたがる時代精神の表徴を読み取ることができるだろう。そのような前提をもとに、横光のなかで

も「未完成」と自認されていたこの作品について検討することを通じて、一九三〇年前後の横光に「転回」をもたらした思想的背景を探ってみたい。

第五章 「ある唯物論者」の世界認識——『上海』と二〇世紀物理学」では、一九三〇年前後の横光が「メカニズム」を経て相対性理論へと接近するとき、その理論的な要諦を「現象」と「物自体」の二項関係のなかで意味づけたことが、図らずも民衆の行動原理を基礎づけているフアナティックな「国粹精神」に眼をひらかせる契機となっていたことを、長編小説『上海』の言説分析から明らかにする。一九三〇年前後の文壇・論壇における自然科学の受容は、大きく精神生理学の領域に偏重していた。そのような状況下において、横光は自然科学が担うべきとされた「真理」を探究するための方法論を、同時代の理論物理学に求めていくことになる。それは『上海』における〈身体〉と〈肉体〉を分かち表現様式の差異に顕著に見いだされる。

横光は、触知不可能な「物自体」の理念を〈肉体〉や「愛国心」の機制と重ね合わせることで、そこに同時代に蔓延していた唯物論的な世界認識とは異なる「物理主義」の思想を醸成させていく。だが、その多分に逆説性を帯びた重層的な理路は次第に忘却され、横光はその後きわめて素朴なカタチで観念論的なイデオロギー信仰へと没入していくことになる。それらを通覧することで、前章と併せて一九三〇年前後までの横光の文学的方法論の根幹に、同時代の理論物理学の発想が確かな存在感をもって影響を及ぼしつづけていたことを確認しておきたい。

第三部では、より広く一九二〇年代から三〇年代にかけて活躍した文学者たちと数理諸科学との邂逅を考察していくことで、そこに共通して見いだされる「合理」から「非合理」への逸脱という主題系を検討してみたい。

第六章 「合理」の急所——中河與一「偶然文学論」の思想的意義」では、横光とともに新感覚派として名が知られている中河與一の代表的な論説「偶然文学論」について、とりわけ量子力学の学術的知見が援用された部分の理論的骨格を検討し、同時代思潮における位置づけを再考することを試みる。一九三五年前後における言説空間においては、「合理」的な思考様式に支えられた「法則」への信頼によって「歴史」を体系化することを試みた左派論壇と、「非合理」性への捻転を軸とした日本浪曼派的な心性（Ⅱ「デカダンス」）は、ともに「合理」と「非合理」の二元論的な体系によって成立する論理構造を前提としている点で、奇しくも共犯関係を結んでしまっていた。

中河の「偶然文学論」は、あいまいで振れ幅のある書き振りが批判されていたが、そのような表現様式にこそ、同時代の言論布置の間隙を突くような「脱構築的」とも言える戦略のあり方を読み取ることができる。それは、同時代における田邊元の数理哲学との隣接性や、いわゆる「シエストフ的不安」と呼ばれる一連の文化思潮とのかかわりについてもまた、共時的な並行関係を提示すると同時に、一九三五年を境として急速に古典回帰の志向を強めていく中河の世界認識の転換に対しても、ひとつの見通しの良いパスペクティヴを与えることになるはずである。

第七章 「多元的なもののディスクリール——稲垣足穂の宇宙観」では、第三章でも検討した稲垣足穂の「宇宙」にまつわる言説群を読み解いていくことで、その創造

営為の源泉を改めて把握することを試みる。足穂は、幻想的で風変わりなレトリックを得意とする一種の寓話作家としてみなされる傾向が強かったが、同時にまた最新の宇宙科学や理論物理学に対する熱烈な執心も抱きつづけていた稀有な書き手であった。新感覚派の作家として登場して以来、足穂は「必然」の論理に支えられた「生理学」的な世界認識から脱却し、絶えざる運動現象を析出する「物理学」的な世界認識によって物語世界を描くべきであると繰り返し主張している。たとえば、足穂の小説作品では、しばしばあらゆる人間の姿かたちが天体の運動と等価に記述されるが、それはまさに従来の「内面」|| 「近代的自我」という観念形態へのひとつの強力なアンチテーゼとなりえていよう。

加えて、足穂は非ユークリッド幾何学やW・ド||ジッターの膨張宇宙モデルを参照することで、あらゆる物語世界の仕様を「物質」と「場」の相互作用が織りなすドラマ（|| 「タルホ劇場」）へと還元することを目指していた。そのような考え方を「私」と物語世界の関係に敷衍させてみれば、足穂の言う「劇場」の比喩が、きわめて正統な根拠を持ったものとして了解されるだろう。その特異な方法意識は、初の単行本作品となる『一千一秒物語』から後年の随想『僕の「ユリーカ」』まで、足穂文学においてつねに一貫したモチーフとして差し出されていたのであり、それはまた、同時代の「内面」中心主義的な宇宙論に対する批評的視座を持ちえていたことを明らかにしたい。

第八章 「怪奇」の出現機構——夢野久作『木魂』の表現位相——では、夢野久作の短編『木魂』の考察を通じて、同時代の夢野が主張していた「本格探偵小説」の圏域からおのずと「怪奇」的な表徴が出現するまでの回路を再検討することを試みる。『木魂』において「彼」を懊悩させていた「あらゆる不合理と矛盾とを含んだ公式と方程式」は、直観よりも思惟を優先する理知的な世界認識の果てに立ちあらわれるものであった。論理主義・形式主義にもとづいた思考の枠組みが、同時に自然現象に対する「彼」の経験の仕方をも根拠づけてしまうことで、逆説的に「彼」は「数理的な頭ではカイモク見当の付け様の無い神秘作用」の側へと取り込まれてしまう。

作中において、それは表現様式の水準でも確認することができよう。物語の序盤では語りの効果によって保証されていた数理的な秩序体系への信頼は、後半になるにつれて意味論的な逸脱を志向しはじめた。それは「彼」の数学的理性が「非数理的な還境」をも「直覚」してしまうことにも対応しており、ここにおいて「彼」の狂気は、妻子を亡くしたことの悲嘆に拠るものばかりでなく、「彼」が全幅の信頼を寄せていた数学の記号操作が抱え込んでいる構造的な問題でもあったことが了解される。その意味で「彼」が直面していた認識論的な懐疑は、同時代において「探偵小説」から「怪奇小説」への様式的な転化を肯定するための視座をも担っていた。それは「論理」性を追究する「本格探偵小説」と「怪奇」性を追究する「変格探偵小説」が、もとより類別することのできないものであるという夢野独自の文学的理念ともまた響き合っていることを明らかにする。

結論部では、改めて昭和初期という時代が、近現代理論物理学の成立と崩壊のパラダイムを同時に受容した特異な状況下にあったことを示したうえで、そのなかで

文学者たちがどのような精神的動機のもとで理論物理学へと傾倒していったのかを検討する。昭和初期から一九三〇年代にいたるまでの言説空間においては、いわゆる「自己言及のパラドックス」と呼ばれる決定不可能性をめぐる諸問題に関する議論が戦わされていたが、時局においてそれは、凶らずも任意の秩序体系に完結性を与える「超越的なもの」を招来する契機となりえてもいた。それは、柄谷行人が指摘するところの「形式化」の論理に顕著に見いだすことができる。

そのような「合理」と「非合理」が限りなく漸近する時代情勢において、先鋭的な感性を持った書き手たちの興味・関心は、かつてなく同時代の科学思想と隣接することになる。言わば、近代自然科学の内側からその「形式体系」自体を裂開させてしまうような同時代の学術動向において、昭和初期の文学者たちは、その理解度は拙くとしても、そこに確かな文学的想像力の鉅脈を求めつづけていたのである。本論のなかでさまざまな角度から検討してきた「合理」から「非合理」への逸脱の仕方や、現実概念の認識論的／存在論的な転回を物語世界の創作原理として昇華しようという試みは、そのひとつの典型をなすものであった。その意味で、各々の書き手たちが取り組んできた表現営為は、今日においてもなお再考に値するアクチュアルな問いを放っていると言えよう。

## 初出一覧

序論（書き下ろし）

第一章 「科学的精神」の修辞学——一九三〇年代論壇の「科学」へゲモノ——

『日本近代文学』第九八集、二〇一八・五）

第二章 「石原純の自然科学的世界像と昭和初期文壇への影響」

『科学史研究』第Ⅲ期、第二八四号、二〇一八・一）

第三章 「新感覚派の物理主義者たち——横光利一と稲垣足穂の科学観」

『横光利一研究』第一五集、二〇一七・三）

第四章 「観測者の使命——横光利一『雅歌』における物理学表象」

『横光利一研究』第一六集、二〇一八・三）

第五章 「ある唯物論者」の科学観——横光利一『上海』と二〇世紀物理学」

『昭和文学研究』第七五集、二〇一七・九）

第六章 「合理」の急所——中河與一「偶然文学論」の思想的意義」

『文藝と批評』第一二巻六号、二〇一七・一一）

第七章 「稲垣足穂の「新しい」宇宙観」

『早稲田大学大学院教育学研究科紀要（別冊）』第二四巻一号、二〇一六・九）

第八章 「怪奇」の出現機構——夢野久作『木魂』の表現位相」

（論旨の一部を日本近代文学会二〇一七年度秋季大会で口頭発表）

結論（書き下ろし）

※ただし、いずれも初出時から大幅な改稿を施している。